

住まいにおける新しい郷土像の展開 —H・デ・フリースによる 1920 年代後半のドイツでの住宅建設計画を中心に—

山本一貴¹，中江研²

¹ 神戸大学工学研究科建築学専攻・学術研究員，² 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻・准教授

キーワード：モダニズム，ジードルンク，儉約，田園都市，郷土

本論者は、H・デ・フリースによる 1920 年代後半の一連のジードルンク計画を考察対象に、『未来の住宅都市』で提出された理念と手法が実際の空間形成にいかに応用されているかを明らかにすることを目的とするものである。本論者を通じて、第一次世界大戦直後の住宅困窮期におけるドイツで住宅建設をめぐる追求された新しい郷土像の様態を明らかにすることを目指す。1920 年代後半の計画についての考察を通じて以下の結論を得た。個々の住戸の建築計画には『未来の住宅都市』で提示したメゾネット型住宅の手法の展開が見られる一方で、その際にはなかった南面採光を重視する傾向の強まりが見られる。また、「住まう喜び」という価値を重視する立場や家族団らんのある住まいをめざす姿に、『未来の住宅都市』での郷土の追求に通じる共通した視点を見出すことができる。

1. はじめに

本稿は、第一次世界大戦直後の住宅困窮期におけるドイツで住宅建設をめぐる追求された新しい郷土像を明らかにすることを目的とする研究の一環をなすものである。

ドイツでは、第一次世界大戦後のワイマール期に、ジードルンクと呼ばれる住宅団地が数多く建設された。注目されるのは、第一次世界大戦直後の時代である。戦時以来の政治経済の情勢不安定を受けて、資金、物資ともに乏しく、建設活動が停滞していた時期であるが、結婚ブームなどによる住宅需要の増大を受けて、住宅建設に向けて各方面から活発な議論がなされた時期でもあるからである。いわば建設活動の再開に向けた準備期間であると考えられるのである。それにも拘らず、当時何がどのように議論されたかについては、十分な注意が払われてきたとは言い難い。

これまでに筆者らは、第一次世界大戦直後に刊行された、大都市の住宅問題の解決に向けた建設手法の具体的な提案を行う著作に焦点を当て、その計画理念と手法を明らかにし、歴史的に位置づけることを試みてきた^{注1}。考察対象として用いたのは、P・バーレンスとH・デ・フリースの共著『儉約建設について』（1918）¹⁾とH・デ・フリースの単著『未来の住宅都市』（1919）である²⁾。

両著作に関する考察を通して顕わになったのは、第一次世界大戦直後の当時、いかに安価で良質な住宅を建設し供給するか

と同時に、近代化に伴う都市化により大都市に流入してきた人々とその家族の間に広がる、郷土（ハイマート）の喪失感に対して、どのように問題解決すべきかが議論されていること、そして、旧来の郷土芸術運動や郷土保護運動の場合とは性格を異にする郷土像を追求していることである。郷土保護運動などが戦前から郷土の問題を扱ってきたことは周知のとおりだが、それによってイメージされる郷土とは、近代化による都市化の反動として、地方性、伝統性のニュアンスが付加されて理解されてきた。一方、『儉約建設について』と『未来の住宅都市』は、都市で働く人々の生活を考慮して、できる限り都市の近くに住居をつくることを主張し、都市部の住まいに郷土感覚をつくりだすことを主題として掲げ、郷土を健康的な家庭生活を営む場の意味で用いているのである。住宅建設という仕事のなかで、都市に住まいをもつ人々にとっての郷土というものがどのように議論され、どのようにかたちになろうとされたかについて、デ・フリースやバーレンスといったドイツの建築家たちの事績を評価し直すことは、当時の郷土像を追求する姿を多方面から明らかにすることができる意義がある。

ところで、デ・フリースは 1920 年代後半になって複数のジードルンク計画を発表している。そのなかには現在もなお住居として利用されている住宅団地も含まれている。一連のジードルンク計画は、デ・フリースによる新しい郷土像の追求の展開を辿るうえで注目に値する。

そこで、本稿では、デ・フリースによる1920年代後半の一連のジードルンク計画を考察対象に、『未来の住宅都市』で提出した理念と手法が実際の空間形成にいかに応用されているかを明らかにすることを目的とする。なお、これまでに一連のジードルンク計画の一部については、R・イエーガーにより³⁾、『未来の住宅都市』との関連性が指摘されているものの、詳細な分析は控えられており、また、郷土像の追求という視点からも十分な検討がなされていない。

考察の方法について述べる。まずは第2章で『未来の住宅都市』で提示されているデ・フリースの計画理念と手法、そして郷土に関する考え方を確認する。そのうえで続く第3章以下では、1920年代後半の各計画について、いかに『未来の住宅都市』での提案が展開そして応用されているかを分析し、考察を行う。具体的には、各計画を発表した雑誌記事の記述内容、添付の図面、写真を分析材料に、住戸プラン、住棟とその配置計画に焦点を当てて考察を加える。これらの点に焦点を当てるのは、『未来の住宅都市』では、住まいに郷土感覚を生み出す手法として、住戸プランや住棟とその配置が複合的に織り込まれて提案されているからである。これらの点の考察により、本稿で扱う一連

のジードルンク計画と『未来の住宅都市』での提案との比較が可能となり、同書での提案の応用の様態を明らかにすることができよう。また、最後の3番目の事例であるゲレスハイム・ジードルンクについて、デ・フリース自身による論述に、『未来の住宅都市』における郷土というもののあり方に関する議論と関連する主張が見られることから、その点についても考察を深める。

2. 『未来の住宅都市』

『未来の住宅都市』は、従来いわゆる「賃貸兵舎」に暮らしていたような、好むと好まざるにと拘らず、大都市に住む多くの人々の居住環境に関して、大都市の中心部でも彼らの手に届く良質で安価な小住居を供給することを喫緊の課題と認識し、その解決を目指すとともに、都市部の人々の間に広がる郷土の喪失感に対して問題解決を図ろうとしたものである。具体的には、図1と2に示すように、従来よりも階高を抑えつつも、二層分の大きな居間をもつメゾネット型住宅を提案するもので、それを積層させつつ南北方向に連なる住棟、これを平行に配置しその間に広々とした空地をもつ住宅街区を提案するものであった。デ・フリースはこうした空間形成を通して、大都市の住まいにおける郷土感覚の再生を目指したが、それは住まいが健全な家庭生活の場であるという感覚を再び呼び覚まそうとするもので、「静けさ」や「あたたかさ」、「喜び」を求めるものであった。

3. メゾネット型住宅の可能性の模索

1927年に『Die Form』誌上に掲載された「メゾネット型住宅というテーマについて」と題する論考⁴⁾でデ・フリースは、『未来の住宅都市』で提案したメゾネット型住宅の基本的な理念と手法を再度概説するとともに、その発展形となる平面計画案を2つ発表している。いずれも住棟の並べ方や外部の庭との関係については、記述によっても図版によっても示されていないが、住戸および住棟の平面計画の展開を示すものとして注目される。

1つは図3に示す住戸の計画案である。『未来の住宅都市』での提案と同様に、上階（図左側）に入口を持ち、下階（図右側）に大きく吹抜けた居間を設け、寝室となる3つの部屋をもつ。異なるのは階段と調理場の位置である。調理場は、かつて居間に附属するかたちで住戸内廊下の下に置かれていたが、居間と明確に分離され、かつて流しとして用意されていた部屋にまとめられた。そして階段は、かつて居間の隅にL字形に配置され

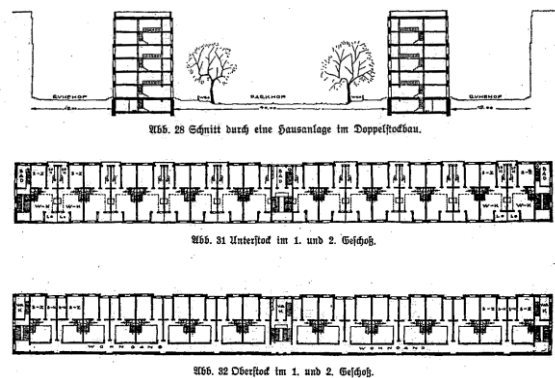


図1 メゾネット型住宅 断面図及び平面図（1919）

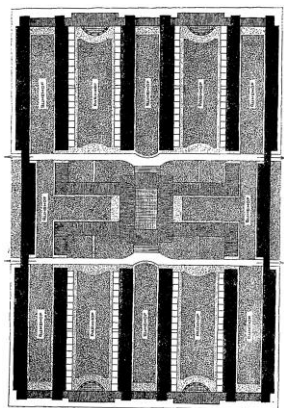


図2 メゾネット型住宅 街区計画案（1919）

ていたが、廊下の外側に直線状に配置される。さらに住戸間に光庭らしきものが設けられている。これは階段や廊下部分の採光や換気が期待されていると考えられる。また階段の位置と形状の変更から廊下も短くなり、部屋の面積増大に活用されているように見える。

もう1つは図4に示す計画案である。『未来の住宅都市』での提案そして上述の図3の計画案と同様に、各住戸は、上階(図右側)に入口を持ち、下階(図左側)に大きく吹抜けた居間を設け、寝室となる3つの部屋をもつ。この計画案についてデ・フリースは「ファサード概念をきっぱりと否定しつつ、植物的形象の生物学的形態に基づき、メゾネット型住宅を更に発展」^{注2}させたものと位置づける。『未来の住宅都市』での提案と決定的に異なるのは各住戸の連なり方である。各住戸は、『未来の住宅都市』では住戸を貫く南北方向の通路に対して東側あるいは西側の同じ方向に片側に並んでいたが、この計画案では、同様に南北方向に通路が走る一方で、植物の葉が1枚ずつ方向を違えて茎に付くように、方向を交互に変えて両側に配置される。しかも各住戸は、東西から南方向に斜めに振って計画される。

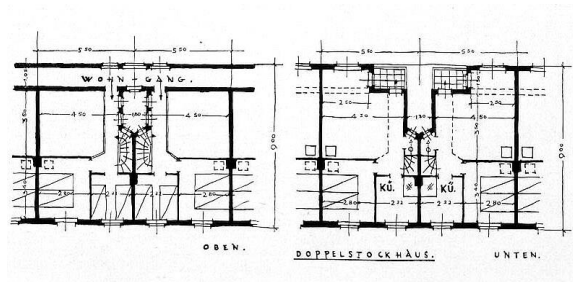


図3 メゾネット型住宅 平面図 (1927)

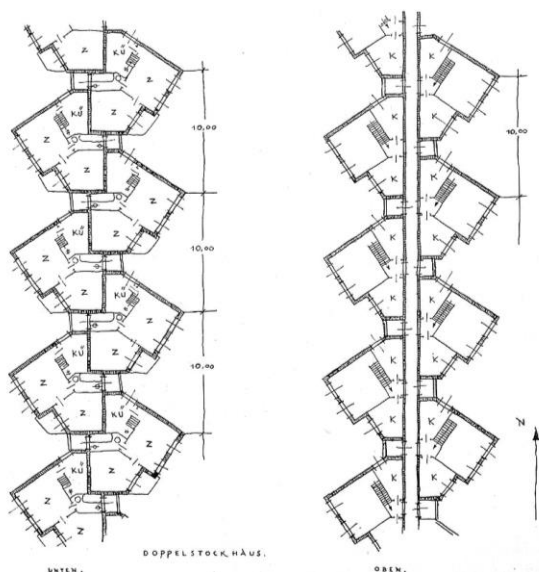


図4 メゾネット型住宅 平面図 (1927)

また、通路の下部を利用した食事空間やロジアはなくなり、バルコニーらしきものが主寝室と思われる下階南側の部屋に付随して計画されている。こうした手法の展開は、ファサード概念の否定に向けた造形上の大胆な刷新を図るものであるとともに、南面採光を重視するものであると考えられる。

4. メゾネット型住宅の応用：ミュールハイム・ジードルンク

1929年に『Die Form』誌上でデ・フリースは、ドイツ西部のミュールハイムに計画中のジードルンクに関する論考を発表した⁵⁾。これは、実現こそ至らなかったが、ミュールハイム市とドイツ工作連盟との共同で事業化されたモデルジードルンクの計画である。9名の建築家により20の独立住宅が計画された^{注3}。うち2つがデ・フリースによるものである。いずれも『未来の住宅都市』での提案と異なり、共同住宅ではなく、独立住宅であるものの、これと同様にドイツ工作連盟の事業であったヴァイセンホーフ・ジードルンクのように、それぞれに実験的な試みがなされていると考えられる。こうした実験的な試みにおいてデ・フリースがどのような住宅案を計画したのかが注目される。

計画地(図5)は丘陵で、南西から北東に向かって勾配のある道路が通り、南東方向が山側、北西方向が谷側になる。デ・フリースによる住宅案の敷地は、図5の配置図にその位置を加筆したように、いずれも山側を背にする斜面地であった。

1つは山側の南端に位置する住宅(#10)である。斜面地に建つ3階建ての住宅である。ここでデ・フリースは、イエーガーが指摘するように、斜面地に合わせるように空間を設計するとともに、『未来の住宅都市』で提案したメゾネット型住宅の手法を応用している。それは、デ・フリースが「Doppelstockhalle」と呼ぶ、1階と主階の2階を吹き抜く大きな居間が南側に計画されている。2階にも設けられた第2の居間はテラスらしき部分を介して外部と接続し、庭や丘の景色も望める空間になっている。なお、その他の諸室に触れておくと、玄関のある1階には、洗い場や台所、貯炭庫を備えた地下室があり、2階には、両親用の寝室と子ども用の寝室がそれぞれ1つ、便所と浴室がある。3階には寝室と乾燥室がある。

こうしたメゾネット型住宅の手法の応用をデ・フリースは積極的に行おうとしていたようであり、山側の北端に位置するもう1つの住宅(#20)(図7)について、敷地の傾斜が比較的緩いためにメゾネット型を「断念」したと説明する^{注4}。なお、大きな居間がここでも南に面して計画されている。



図5 ミュールハイム・ジードルンク 配置図 (1929)
(「#10」「#20」および囲み線は筆者加筆)

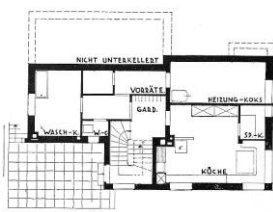
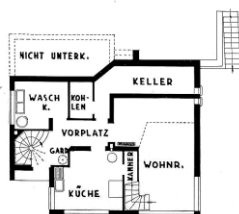
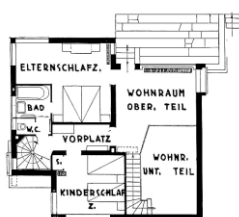
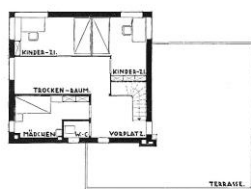
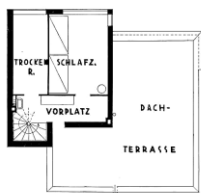
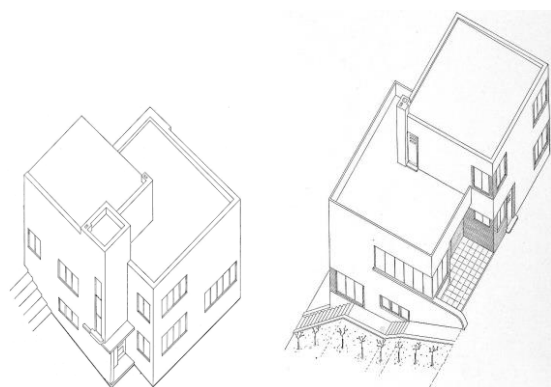


図6 ミュールハイム・ジードルンク 図7 ミュールハイム・ジードルンク
#10 (1929) #20 (1929)

5. 「住まう喜び」の追求：ゲレスハイム・ジードルンク

5.1 ゲレスハイム・ジードルンクと列状建築

デュッセルドルフ近郊のゲレスハイムに建つジードルンクは、デ・フリースの設計により実現した計画である^{6),7),8)}。ライヒスハイムシュテテン制度を用い、賃貸ではなく所有になるものである。全住戸数は101戸で^{注5}、いずれも専用庭をもつ。1930年7月から入居が開始された。

デ・フリースはこのゲレスハイム・ジードルンクについて、1930年に『Die Form』誌上で解説している。それは、「都市計画の問題性」と題する論考においてであり、自らのジードルンクを解説すると同時に、当時話題を集めていたダーマーシュトック・ジードルンクを論じることをテーマに据えていたことからくる。なお、この論考は、先行してダーマーシュトック・ジードルンクを論じたA・バーネの論考^{注6}とともに、「列状建築[Zeilenbau]」に関する議論が起こるきっかけとなった^{注7}。デ・フリースは、「偶然的な家並みから首尾一貫して離反する列状建築」を『未来の住宅都市』で既に提案したと強調し、列状建築の先駆者を自負するとともに、住宅団地の開発に対する計画の必要性を訴える。デ・フリースが「都市計画の問題性」として問題視するのは、全体が兵舎に見えるような、人間らしさの欠落した機械的な造形表現であり、ダーマーシュトックについては特に、定規で引いたような幾何学的な構成に向けられている。ゲレスハイム・ジードルンクは、デ・フリースによる唯一の実現した住宅団地であるとともに、同年7月には『Die Form』誌上での議論との関わりから、論者の指摘に対するデ・フリースの見解を示した記事が発表され⁷⁾、翌1931年には補完となるゲレスハイム・ジードルンクに関する補完記事⁸⁾も掲載されていることから注目される^{注8}。以下では、論考「都市計画の問題性」を中心に、ゲレスハイム・ジードルンクについて考察を行う。

5.2 ゲレスハイム・ジードルンクのプラン

配置図を図8に示す。敷地は東西に長い長方形であり、南側の幹線道路よりも約25m高い位置にある。南側に東西に1列に延びる住棟、北側に南北方向に延びる7列の住棟が計画されている。敷地の北側には運動広場が計画されており、この運動広場と北側の住棟を取り囲むように、各住棟にアクセスするための道路が計画されている。

各住戸に専用の庭も計画され、東西方向の住棟にはその南側に、南北方向の住棟にはその東側に配置されている。庭の一部

は正方形に近い形状をしているが、細長い庭は、果樹を植える
と、隣の庭に果実が落ちるおそれがあるので、できる限り避け
るべきだとデ・フリースは主張し、『未来の住宅都市』のほか、
『儉約建設について』とも共通した見解を示している。

住戸プランを見よう。デ・フリースの論考にはタイプ A, B,
C が平面図と立面図とともに紹介されている。少なくとも 3 種
類のタイプが用意されていたことが分かる。各タイプの詳細な
位置は、同論考では明示されていないが、図面や写真、そして
デ・フリースによる一連の論述から、次のように推定できる。
図 8 の配置図に破線によって加筆したように、タイプ A は東西
方向の中央 4 戸用、タイプ B はそのすぐ両隣の住戸用、タイプ
C は南北方向の住戸用と考えられる。東西方向の住棟の両端、
各 9 戸に対応する住戸プランの提示は見られず不明である。

タイプ A(図 9)は 3 階建て 4 室住戸で、このタイプを中央の 4
戸にのみ使用したとデ・フリースが述べていることから、その
位置が推定できる。タイプ B と同様に、居間と各居室は南側(庭
側)に向けられ、玄関を北側(道路側)にもつタイプである。1
階に居間、台所と便所、2 階に主寝室と浴室、3 階に部屋が 2
つ計画され、玄関横の階段で結ばれている。

タイプ B(図 10)は 2 階建て 4 室住戸である。南北方向にずれ
た独特の平面形状、正方形の庭を備えるのはタイプ A とタイプ
B のみであるというデ・フリースの論述から、タイプ A の両側
に連続的に延びる西 12 戸、東 16 戸の住戸用と推定できる。1
階に居間と部屋が各 1 つ、台所と便所、そして庭側にテラス、2
階には附室をもつ主寝室と部屋が各 1 つ、浴室が計画され、タ
イプ A と同様に、玄関横の階段で結ばれている。

タイプ C(図 11)は 2 階建て 6 室住戸である。6 室の住戸タ
イプは南北方向の住棟に計画したというデ・フリースによる論
述があることから、その位置を推定できる。但し、竣工写真によ
ると、すべてが 2 階建てではなく、一部が 3 階建てとなっている。
また、配置図や竣工写真によると、道路が住棟に対して西
側にあるにも拘らず、タイプ C の図面によると、反対に、道路
が住棟に対して東側にあり、齟齬がある。1 階平面図そして道
路側立面図から玄関の位置を考え合わせると、図面に添えられ
た方位が 180 度誤って記載されたものと考えるのが妥当である。
つまり、1 階には庭側(東側)に居間兼台所があり、道路側(西
側)に主寝室がある。ほかに寝室が 1 つ、便所がある。2 階に
は部屋が 3 つ、浴室が計画され、玄関脇の階段で結ばれている。

どのタイプも、2 ないし 3 階建ての低層であり、『未来の住宅
都市』で提案していたような高層住宅ではない。また、吹抜け

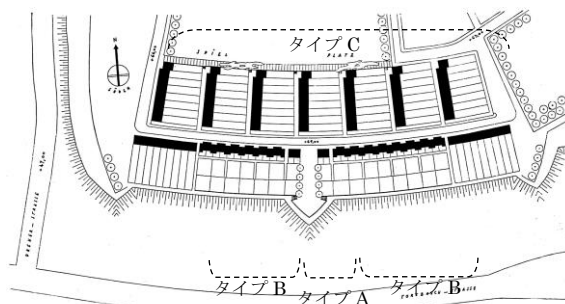


図8 ゲレスハイム・ジードルンク 配置図(1929/30)
(「タイプA」、「タイプB」、「タイプC」及び囲み線は筆者加筆)



図9 ゲレスハイム・ジードルンク タイプA (1929/30)
平面図(左:1階, 中:2階, 右:3階)及び立面図(左:道路側, 右:庭側)

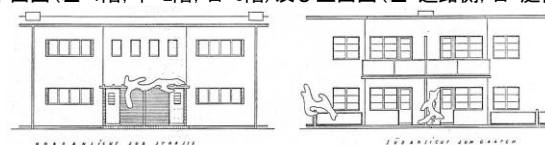


図10 ゲレスハイム・ジードルンク タイプB (1929/30)
平面図(左:1階, 右:2階)及び立面図(左:道路側, 右:庭側)

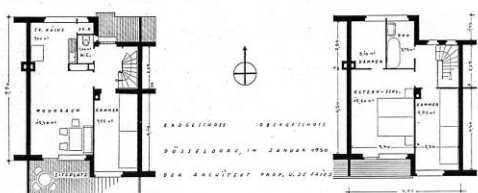


図11 ゲレスハイム・ジードルンク タイプC
平面図(左:1階, 右:2階)及び立面図(道路側)

空間もなく、メゾネット型住宅の手法を応用したものとはいえない。南北方向を軸とした住棟だけでなく、東西方向を軸とした住棟をも計画している。しかし、外部の造形に『未来の住宅都市』での提案との共通性も見いだせる。デ・フリースは『未来の住宅都市』で、外部の造形美に関して、リズムカルで立体的な形態言語の使用を「印象深い都市計画的な効果を獲得する」ために必要であると主張し、そうした形態言語の使用をメゾネット型住宅の立面図からも読み取ることができたが、ここでも同様に、平坦ではなく、凹凸のある立体感のある造形が立面に見て取ることができるからである。

また、タイプAとタイプBのような東西軸の住棟のための住戸プランと、3章後半で言及したメゾネット型住宅の発展形として1927年に発表された住戸プラン(図4)との間には共通性が見られる。タイプAやタイプBは、この1927年の計画案の展開と見ることができる。共通性とは、居間と居室を南に向けて配置し、北側に台所を配置するという空間構成である。1927年の住戸プランが、当時のドイツにおける住棟配置の基本であった^{注9}、南北軸の住棟用であるのに対して、タイプAとタイプBは、反対に、東西軸の住棟用である。室の配置に共通性が見られるものの、住棟の軸について従来の基本を外し、居間と居室のすべてを南にまっすぐ向けて配置するという展開が、両住戸プランの間に見られる。

5.3 ゲレスハイム・ジードルンクと郷土

郷土に関する議論との関連を見よう。ゲレスハイム・ジードルンクについてのデ・フリースによる解説のなかで注目されるのは、彼が「住まう喜び[Wohnfreudigkeit]」こそが最も重要であると主張していることである^{注10}。この主張は、具体的には、敷地を通り抜ける道路に対してなされた。すなわち、デ・フリースは、東西の道路を、一直線に計画するのではなく、地形に応じて緩やかな曲線を描いて計画したことにより、道路に光が射し込むことができ、それによる「光が変化する現象は、道路を生き生きとさせ、同時に高い住まう喜びをそれに授ける」と説いているのである。こうした住まうことに対する喜びに価値を置くことは、『未来の住宅都市』での「郷土」の主張と重ね合わせることができよう。なぜなら、「喜び」は住まいにおける郷土の感覚を呼び覚ます上で、「静けさ」や「あたたかさ」とともに求めるものであったからである。

また、前稿において『未来の住宅都市』そして『儉約建設について』での記述から、デ・フリースらが問題にしている「郷

土」(ハイマート)とは、健全な家庭生活を営む場、のことをいうと考察した。つまり、『儉約建設について』のデルンベルクによる緒言に、「青少年の扶助、仕事以外の健全な生活状態、活動の休養と喜び、これらの概念の複合体を、私たちは、ハイムや家庭生活という概念で要約する」^{注11}とあり、他方、『未来の住宅都市』での郷土の喪失の状態を説明するのに、不健全な生活状態を次のように描いている。「日々の仕事を終えた父親は、詰め込みすぎて良くない、調理の臭いと子どものわめき声で満ちた非常に狭すぎる部屋に、静けさと安らぎを見つけ出すことはできない。」^{注12}

本節で考察の対象として取り上げている論考「都市計画の問題性」のなかにも、こうした家庭生活についての論及が、居間と台所の関連で行われている。改めてゲレスハイム・ジードルンクの部屋の構成を確認しておく、調理をする台所は、家族が食事をし、団らんする居間と一体的に計画がなされている。タイプCは明らかに一室空間である。こうした室の構成は、居間と台所を合わせたヴォーンキューッヘ[Wohnküche]と呼ばれ、実際にそう名付けられている。タイプA及びBの場合には、「居間[Wohnraum]」と「流し付き台所[Spülküche]」と名付けて分けて計画されているが、その境界は開かれており、ほとんど一室空間であり、ヴォーンキューッヘに類似する方式と見なすことができる。こうしたヴォーンキューッヘ方式の採用についてデ・フリースは、デュッセルドルフ市の規程を前提としていることを述べるとともに、居間と台所を分けるよりかは、一体としてヴォーンキューッヘの方が好ましいことを述べている。ヴォーンキューッヘの方が好ましいことを述べるのに、居間と台所を分ける住居に対して、ハンブルクの住居で見聞した「経験」を引き合いに出して、次のことを指摘する。すなわち、家族がみな仕事を終わると小さな台所で過ごすこと、台所の隅に座って暖かいレンジそして妻子の近くで仕事終わりのコーヒーを飲むのを好む主人がいること、他方で、妻は晩御飯の用意をするときには、台所から立ち去ることができないこと、しかも子どもの面倒も見なければならないこと、子どもの面倒をみるには、居間と台所が分離していたり、のぞき窓があったりするのでは、いざというときに助けに行けないので不十分なことを指摘している^{注13}。つまり、家族は集まって過ごすのが好きなこと、居間と台所を分離するのは、父、母、子、誰にとっても生活するうえで望ましくないことを指摘しているのである。そしてこの「経験」について、「この事例は決して経験としてあるだけではない」と述べ、「人間の生活と生活するのに必要なことについて、たいへ

ん才能ある建築家たちですらあまり知らない証拠を示しているにすぎない」と続けており^{注14}、単なる経験を超えたデ・フリース自身の信条と考えられる。こうした住まう人々や家族の生活の実情とそれへの理解を示す態度は、『未来の住宅都市』で「郷土」を議論する態度と深く通じるところがある。

このようにみると、ゲレスハイム・ジードルンクは、「住まう喜び」に価値を置いて計画されたという点で、そして、健全な家庭生活を営む場を用意しようとしている点で、デ・フリースが目指す「郷土」のかたちを示す重要な事例の1つであるといえる。

6. おわりに

本稿では、ドイツの建築家デ・フリースによる1920年代後半以降のジードルンク計画について、『未来の住宅都市』で彼が提示した理念と手法がいかに応用されているかについて考察した。個々の住戸の建築計画には、『未来の住宅都市』で提示したメゾネット型住宅の手法の展開が見られる一方で、その際にはなかった南面採光を重視する傾向の強まりが見られる。また、「住まう喜び」という価値を重視する立場や家族が集まって時間そして空間をともに過ごす、いわば団らんのある住まいをつくり出すことをめざす姿に、『未来の住宅都市』での郷土の追求に通じるデ・フリースの視点を見出すことができる。

謝辞

本稿は科学研究費助成事業(若手研究(B):課題番号 15K18194)による研究成果の一部ならびに神戸大学持続的住環境創成(積水ハウス)寄付講座研究プロジェクトの研究成果の一部である。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) Behrens, P. und de Fries, H.: Vom sparsamen Bauen, Verlag der Bauwelt, 1918.
- 2) De Fries, H.: Wohnstädte der Zukunft, Verlag der Bauwelt, 1919.
- 3) Jaeger, R.: Heinrich de Fries und sein Beitrag zur Architekturpublizistik der Zwanziger Jahre, Gebr. Mann Verlag, 2001.
- 4) De Fries, H.: Zum Thema: Doppelstockhaus, Die Form, Jg. 2, H.6, 1927, 188-190.
- 5) De Fries, H.: Werkbundsiedlung Mühlheim-Ruhr, Die Form, Jg.4, H.14, 1929.7.15, 373-386.
- 6) De Fries, H.: Problematik des Städtebaues, Die Form, Jg.5, H.7, 1930.4.1, 189-193.
- 7) De Fries, H.: Diskussion über den Zeilenbau: Zur Problematik des Städtebaues, Die Form, Jg.5, H.14, 1930.7.15, 379.
- 8) Reichsheimstättensiedlung Düsseldorf-Gerresheim, Die Form, Jg.6, H.3, 1931, 110-111.

注釈

- 1) 山本一貴, 中江研: 第一次世界大戦後のドイツにおける「儉約」の

建築理念と方法—ベーレンスとデ・フリースの共著『儉約建設について』の歴史的位置づけをめぐって—, 日本建築学会住宅系研究報告会論文集 8, 123-132, 2013.12. 山本一貴, 中江研: ハインリヒ・デ・フリース著『未来の住宅都市』にみる第一次世界大戦後のドイツにおいて目指された大都市の住まいの計画理念と方法, 日本建築学会住宅系研究報告会論文集 9, 2014.12, 39-46

- 2) De Fries: Zum Thema: Doppelstockhaus, 189.
- 3) De Fries: Werkbundsiedlung Mühlheim-Ruhr, 374-375.
- 4) De Fries: Werkbundsiedlung Mühlheim-Ruhr, 386.
- 5) 図7に示す配置図によると、102戸が計画されているが、以下によると、101戸とある。Reichsheimstättensiedlung Düsseldorf-Gerresheim, 110-111.
- 6) Behne, A.: Dammerstock, Die Form, Jg.5, H.6, 1930.3.15, 163-166.
- 7) 一連の議論に関するベーネ及びデ・フリース以外の論者は次の通りである。A・フィッシャー, W・シュヴァゲンシャイト, W・ローツ, (以上9号(1930.5.1)), H・シュミット(14号(1930.7.15))。
- 8) なお、補完記事の執筆者は、デ・フリースであると思われるが、記載されていないため不明である。
- 9) 住棟の軸に関する時代背景に触れておくと、住棟の軸について当時のドイツの基本は、東西軸ではなく、ダーマーシュトック・ジードルンクにも見られるように、南北軸だった。東西軸か南北軸かどちらが適切かについては、このゲレスハイム・ジードルンクを発表する前年の1929年4月に開催された、ドイツで経済的な住宅建設を推進するための大規模な集会においても議論的だった。中江研: 衛生学者、医学者、主婦らとの議論にみる1920年代後半から1930年代初頭にかけてのフーゴー・ヘーリンクの住宅設計における注視点, 日本建築学会計画系論文集, 74(640), 1471-1480, 2009. また、デ・フリース自身も、ここでの東西軸の採用を「現在の通常の都市計画の基本的見解とは反対」であると述べている。De Fries: Problematik des Städtebaues, 189
- 10) De Fries: Problematik des Städtebaues, 191
- 11) Behrens, de Fries: Vom sparsamen Bauen, 7ff.
- 12) De Fries: Wohnstädte der Zukunft, 13ff.
- 13) De Fries: Problematik des Städtebaues, 191
- 14) De Fries: Problematik des Städtebaues, 191

本稿は、山本一貴, 中江研: 住まいにおける新しい郷土像の展開—H・デ・フリースによる1920年代後半のドイツでの住宅建設計画を中心に—, 日本建築学会住宅系研究報告会論文集 10, XX-XX, 2015.12, を、一部修正を加え、本報告書用に再編したものである。

